

# 地名研究の視点とその系譜

—小地名の研究を中心に—

関 戸 明 子

- I. はじめに
- II. 柳田国男の『地名の研究』とその位置づけ
- III. 地理学における研究
- IV. 分析手段としての地名
- V. むすび

## I. はじめに

わが国において地名が本格的に研究対象になったのは、近世のことである<sup>1)</sup>。地誌に関心の深かった新井白石<sup>2)</sup>は、『国郡名字考』『河川地名両字通用考』などを著している。また本居宣長<sup>3)</sup>は『国名考』『地名字音転用例』などで、古代文献の地名の字音研究を進めた。これらの研究のように、近世の地名研究は、国名、郡名などの大地名の歴史的考察を中心としている。

明治に入ると、喜田貞吉ら歴史学者によって地名が論じられるようになる。これらの成果を土台にして、地名大辞典の時代を迎え、邨岡良弼<sup>4)</sup>、吉田東伍<sup>5)</sup>らの著書が刊行される。これらの辞書で扱われている地名も、近世からの流れをうけて、著名な大地名であり、その歴史的考証が行われている。

一方で、字名などの小地名の研究は、柳田国男によって始められた。小地名は住民の生活に密着しており、土地に対する認識をあらわしていると考えられる。筆者もむら人の土地に対する認識を解く鍵としての小地名に関心がある。

そこで以下、小地名の研究に焦点をあてて、従来

の研究の整理を試みる。

## II. 柳田国男の『地名の研究』<sup>6)</sup>とその位置づけ

まず、先駆者である柳田の地名に対する考え方をあとづけておく。

柳田は、地名とは「要するに二人以上の人の間に共同に使用せらるる符号である」<sup>7)</sup>と述べ、「地名は我々の生活上の必要に基いて出来たものであるからには、必ず一つの意味をもち、それが又当該土地の事情性質を、少なくとも出来た当座には、言い表して居ただろう」と推測し、「自然に発生した地名は始めから社会の暗黙の議決を経ている。従ってよほど適切に他と区別し得るだけの、特徴が捉えられて居る」<sup>8)</sup>と考えている。ゆえに、地名が命名される際の「或言葉を或地形に結び付けた最初の動機」を究明することによって、「人が山川原野に対して古来如何なる態度を以て臨んで居たか」<sup>9)</sup>を知ることができるとする。

地名の成り立ちについては、「実際は多くの新しい普通名詞も同じ様に、誰もがそう呼ぶより他は無いと感ずる名がただ一つあって、それに気の付く力が昔の人は至って鋭敏であったのである。何にもせよ使用者の要求を代表せず、群の生活に相應せぬ地名は記憶せられて永く残る筈が無かった」<sup>10)</sup>と説いており、それゆえに、当時の人々の生活を推測できるのである。そして、『地名の研究』の序の中で、地名を裏付けしている「人生を明らかにすることが、

実は地名を研究する唯一の目的」<sup>11)</sup>であると述べている。ここに柳田の民俗学の立場からの地名の研究の特色があり、単に地名の語源の考証をするだけに留まらず、住民の生活史を明らかにする手がかりとして、地名を重視しているのである。ただし、地域・空間を探求するという立場からは、場所の表現としての地名のもつ価値が十分に生かされていないとも感じられるのである。

さて柳田は、地名の命名の順序からその分類を行っている。柳田の地名分類に関する考え方は各論考ごとにばらつきがあるが、それをまとめると、まず「元来地名の付け方には客観的と主観的との二面」<sup>12)</sup>があり、旅行者や往来の人が通りすがりに付けていく客観的地名は永続するためには強い意思が必要で、一方、人の占有経営に伴う主観的地名はこじつけでも押し通すことができるとしている。また「地名を分類するのに最初に考えねばならぬのは、地点名と地区名との差別である」<sup>13)</sup>とし、どこで終りになるのか不確かな地点名と、限界と面積とを持つ地区名とに分け、その発生の順序は地区名の方がおおむね遅いと述べている。次の段階の地名分類は、命名当時の事情が占有の前か後かで分けて、標前地名・標後地名と名づけている<sup>14)</sup>。このほか柳田は、地名には元来3つの区分があるとし、遠望地名、目標地名、占有地名をあげている<sup>15)</sup>。そして、遠望地名とは最も古いもので海岸や舟の上から見てつけられたもの(例、大島)、目標地名とは旅人・狩人などによってつけられたもの(例、一本松)、占有地名とは自分のものとして名づける時にできるもの(例、八升まき)としている。占有地名については、歴史上多くの意味をもっていると述べ、地名を研究することによって土地と人との関係を物語る手がかりを得ることができる<sup>16)</sup>と説く。

さらにこの考え方を発展させ、次のような分類も行っている。柳田は土地利用の段階に従って地名の起源を考え、発生の古いものから、①利用地名、②

占有地名、③分割地名の順序となると<sup>17)</sup>、

①利用地名 境界が不定であり、古いのは通過・行旅・水運の目標としたもの、次いで採集・捕獲に関するもの、最後に耕作に関するものが発生する

②占有地名 人が広い山野を区画して、これだけは自分のものであるとして名付けた地名

③分割地名 すでに区画されている地域を分ける時、今までの地名を保存し、上・中・下、東・西・南・北などを冠するもの

と述べる。これは、遠望地名、目標地名の2つを利用地名にまとめ、新たに分割地名を加えたものであることが分かる。これまでの経過を整理すると表1のようになり、最後の分類が、柳田の監修した『民俗学辞典』の「地名」の項<sup>17)</sup>でも採用されている。

表1 柳田国男の地名分類

初出年	分 類
1912	客観的地名・主観的地名
1926	地 点 名・地 区 名
1926	標 前 地 名・標 後 地 名
1930	遠 望 地 名・目 標 地 名・占 有 地 名
1932	利 用 地 名・占 有 地 名・分 割 地 名

注 6), 7) より作成

以上のように、柳田の地名の研究は民俗研究の一つとして行われており、時期的には明治末から昭和初期(1910~1933年)に集中している。これについて、桜井徳太郎<sup>18)</sup>は、当時の日本の状況が、大正期にはヨーロッパ近代合理主義を至上とする学問に対する反省があり、昭和初期にかけては学界を風靡した郷土研究<sup>19)</sup>の高まりと一致して、柳田をかくのごとき方向へ進めさせたと考えている。一方、千葉徳爾<sup>20)</sup>は、柳田の民俗研究の資料の中心が昭和初期には文献から口頭伝承に移っていき、その兩者をつなぐものとして、言語あるいは固有名詞としての地名

が柳田の関心をひき、この時期に地名の研究が盛んに行われたとしている。

柳田は『地名の研究』の序で、地名を「アイヌ語ならアイヌ語のただ一側面ばかりから説かう」とすることを批判しており、当時、日本のどの地名でもアイヌ語で解こうとした流行に対する反発が研究の動機となったとも考えられる。そして地名研究を広義の人類学に置き、その人類学における位置を、データとしては耳の働きによって採集できる日承文芸の部門に入るとして、その中でも、命名法や新語造成法の部門に地名研究を位置づけている<sup>21)</sup>。また、のちに柳田は「之(地名一筆者注)を日本民俗学の練習に、利用して見ようとした」と述べており<sup>22)</sup>、ここに柳田の地名研究の基本的な位置づけが理解されるのである。

### Ⅲ. 地理学における研究

#### 一地名の意義をめぐる一

柳田の論考が盛んに発表されている頃、地理学においてもアカデミックな地理学の先達である山崎直方<sup>23)</sup>、小川琢治<sup>24)</sup>の論考が出されている。

山崎の論文は日本学術協会の中等教育部会の講演筆記で、「主として普通教育に従事している方々の参考に供した」ものである。その主旨は、地名にはそれぞれ起源、理由があり、そこに大きな意味がある。したがって地理を教育する際には、地名（特に外国の地名）の語源を心得ていることが必要であるというものである。このように山崎の論文は地名の教育上の重要性を説くもので、学術的な価値については言及されていない。

一方、小川の論文は、「地名学」(Namenkunde)という学術部門名の呼称を用いた例としては最も早いもののようである。小川は「地名の語源を究めその意義を確かめることは労多くして効少なく、その研究の困難なるに比して収穫の少ない」ものとしながらも、「伝説や文献に残らぬ原住民を推知する唯

一的手段として頗る有効なもので、恰かも人類の居住の歴史を語る化石の如き役割を演じている」<sup>25)</sup>と地名の価値を指摘している。そして地名学的研究の実例として、「漢書」や「魏志」などにみられる中央アジア、西アジアの地名の比定の問題を、プトレマイオス、ストラボンの地理書などを用いて論じている。以上のように小川は地名の価値を十分認識しているが、その研究は、古代地名の現地比定をするに留まっている。

山崎、小川に次いで、戦前には辻村太郎<sup>26)</sup>、長井政太郎<sup>27)</sup>、山口弥一郎、鏡味完二らによって研究が進められた。この中でも山口弥一郎、鏡味完二の諸論文は集大成され日本地名学研究所から出版された。

山口弥一郎<sup>28)</sup>の地名研究の考え方は、『開拓と地名』の序において表明されている。柳田の教えを受けた山口は、地名は「先人の大地に附した記録」「地と人を繋いだ記録」であり、「各時代の各種各様の生活の名残り」を止めていると述べ、地名を解明することにより、「東北の原始の形、開拓の模様、生活の様子」を知ることができるとする。また地名の成り立ちについては、最初に島・川・山を指した指地点地名、交通の必要から島・岬についた使用地名、山野についた狩猟地名が成立し、採取地名、その後占有地名がきて、やがて分配地名や分割地名の必要が生じると語り、柳田の考え方を受け継いでいる。

地名地理学と銘うった鏡味完二<sup>29)</sup>の研究方法は、「5万分の1地形図」を基本に、地名型ごとに分布図を作成し、その歴史解釈を行って語義を解き、発生年代を追求し、全国的地名研究をするというものである<sup>30)</sup>。鏡味は地名の分布を重視し、地名を、初めてある土地に発生した原生地名とそれが広がる伝播地名とに分類し<sup>31)</sup>、また開墾中心地に与えられた地名を胚種地名と呼び、その成長する過程を、後の時代ほど広大な地域を指す地名となる直列拡充、周辺に類縁関係をもつ地名を派生させていく放射拡充というように名づけている<sup>32)</sup>。こうした分析資料とし

て用いる「5万分の1地形図」上の地名について、この地名は集落に与えられたものであるが、それより小さな小字名は自分の土地の名で、他人の土地の名は相互に知らないことが多い。したがって、集落地名こそ現在生きている最小単位の地名であり、そこに資料としての価値があるとしている<sup>38)</sup>。しかし、小字名を特殊な地名として除外するばかりでなく、この知識の共有状態については、検討する必要がある。

以上のように鏡味の研究の特色は、地名の分布の類型を把握することによって地名を体系的に捉え、文化の発達の形跡を明らかにしようとしたことにある。しかし、その分布図は全国図であって、細かい地理的条件は一切無視されており、そこに鏡味の研究の限界が認められよう。

このうち地名の研究を押し進めていった人に、松尾俊郎<sup>34)</sup>、山口恵一郎<sup>35)</sup>、千葉徳爾<sup>36)</sup>らがあげられる。

地図で読みとった地名を古語との関係に照らしつつ解明していった松尾俊郎は、地名とは「人間の社会生活の必要上、地表のそれぞれの場所について、その地を特徴づける事象によって、簡明に表現されたもので、いわば地表を被うてすきまなく、印せられた場所的符号ともいえる」<sup>37)</sup>とし、その意味を「過去・現在にわたって、土地と人間生活とのかかわりを、端的に表現し…、それぞれの自然環境における生活体験の所産である」<sup>38)</sup>ことに求めた。そのなかでも、地形に因む地名は自然に発生したものが多く、住民にとっては「目にうつる土地の形状をそのまま表現したものにとどまらず、その地形を基盤とした生活の実態が、語感の中に受け取られる」と説く。こうした場合には、地形地名は単なる符号的存在にとどまらず、その意味が広がって、住民の日常生活・郷土意識などに深く浸透した内容を伴うと指摘する<sup>39)</sup>。これは、地名を生活環境との関連にまで踏み込んで捉えようとするもので、重要な指摘であると

いえよう。

地図を作成するという独自の立場から現代の地名を考える山口恵一郎は、地名とは「土地が表現する、あるいは土地の上に表現された、いろいろの様子に名づけられた名称」であり、土地本来の性質から生まれた第一義的な地名と、橋や構造物から転じた第二義的な地名に大きく分けられると述べる<sup>40)</sup>。そして地名の命名段階を3つに分け、直感的で他意のない地名が生まれる素朴命名期、地名をなんらかの形で区別する区別命名期、命名の法則をつくり、それに則って地名をつくる規制命名期、とそれぞれ呼んでいる<sup>41)</sup>。規制命名期が地図作成時の法則的な地名処理の段階にあたるのである。さらに、「地名の発生における本来の有意性に着目」して、次のような類型を設定した<sup>42)</sup>。

地形語 自然環境を端的に表現するか、または広くこれに因むもの。

法制語 土地制度や税制、または軍事・政治などに関連して与えられたもの。

社会語 狩猟・漁撈・農耕、または交換経済・共同生活など、生産・流通に関連して発生したもの。

生活語 信仰・民俗・口碑・伝承・衣食住など、生活に関連して発生したもの。

また、地名の分布を考察する方法として、個としての地名ではなく群としての地名に重点をおく考え方をとり、同種同根の地名の集合を“地名群落”と称し、「地名生態学」の立場<sup>43)</sup>から考察を試みていくところに、山口独自の姿勢がうかがえる。

千葉徳爾は「地名呼称の中に、人が特定の土地の特性、内容に注目して命名したかが示されている」ことから、地名が土地と人とのかかわりを知る手がかりとなるとする。そこで、地名をまずその分布、ことに地表の状況に即して記録し考察するために、地名を「一つのセットとしてその配置状態をとらえ、それぞれの特徴をその発達史的にさぐっていくとい

う方法」<sup>49)</sup>をとっている。そこで、地名の地表空間における配置を明らかにすること、すなわち地形図上にその位置を表示することによって、歴史資料としてより高い価値をもちうると主張するのである<sup>49)</sup>。こうして、白山山麓、三河山間部、石見高原などで実証的な研究を進めている。

また、「地名を考えるには命名使用した人びとが、どのような立場にあるかを忘れてはなるまい」と述べて、支配者が間接的に利用する公称地名よりも、土地住民が私称として直接的に利用する通称地名を重視する<sup>49)</sup>。このように千葉の研究は「地域住民が日常通称として使用している、最小範囲をさす名称」<sup>49)</sup>を採集、分析し、土地と人とのつながりを解くことに関心がよせられる。

以上の地理学的見地になつての考察に加えて、千葉は民俗学の立場からも次の指摘を行っている。「地名の位相が現在の住民の認識する三次元空間をそのままに反映するものではない」。しかし、通称地名は「かなり長期にわたって住民が知覚し、意識してきた三次元空間についてのもの」であり、「民間知識の一つとしての空間認識のありかたを示す指標」として利用することができるとする<sup>49)</sup>。そこで、「従来のように発生や意味内容から分類するのではなく、これを地名の呼称から住民に日常関係の深いものの順に、A、B、C……等に分類し、この関係の遠近あるいは直接的間接的という順序によって、（三次元空間における配置、または地図上の距離の遠近でなく）位相化してとらえてみる方法」を提案し、いくつかの事例でもって示している<sup>49)</sup>。このように、小地名によって住宅地、耕地、山林原野、聖地・異界のように判別し、土地利用のかかわりかたにおける関係の深さでこれらの要素相互の親縁関係を示すという試みは、非常に示唆に富むものである。

次に、ここで視点をかえて、小地名、特に小字の機能および小字名の起源について、水津一朗<sup>50)</sup>、金田章裕<sup>51)</sup>の考察にふれておく。これは小字の名称の

意味を直接に分析したものではないが、小字を中心とする小地名の研究に対して貴重な知識を与えてくれる。

水津一朗は、社会生活の行われる最小の地域単元を「基礎地域」と呼び、「原初的には、基礎地域は1家族生計可能地積(字)の群からでき、この地積は、1日労働可能地積(一筆耕地)の集合体であった」<sup>52)</sup>と語り、田畑の小字が1家族の年間可養規模、1～2町に集中すると指摘した。さらに、小字を基礎地域の発展系列の中でとらえ、古代のプロト垣内(樹林や生垣などでかこまれた田畑をふくむ1家族の土地保有単位)が、中世以降、保有地の分散をまねくとともに水利調整を軸とした字ないし坪に再編成され、経営上の規制力によって機能的バランスを保つが、近代になると一筆耕地の機能が強まり小字的空間の機能が徐々に喪失していったと語る。

一方、金田章裕は、条里呼称法と小字地名の土地表示様式の変遷のプロセスを検討した。8世紀には地域差が大きいものの、小字地名の名称による土地表示から条里呼称法を導入して、条里坪番号+小字地名の名称という表示様式へまず変遷し、条里プランがよく定着した地域では次第に条里坪付のみによる表示へ移り変わったが、10世紀に入ると条里呼称に小字地名が付加され始め、やがて条里呼称と小字地名が併用されるようになり、ついには小字地名だけによる表示が一般化した、ということを明らかにした。この10世紀以降の小字地名が現在の小字地名の起源といえるものと述べている。

ここまで地理学における地名研究の流れをたどってきたが、その初期においては地名の占める位置は高かったが、科学としての地理学が確立されていくにつれ、地名研究は傍流に押しやられていった感がある。これは、地名自体を研究することが軽視され、分析手段として有効なときのみ利用されてきたことにあると考えられる。そこで、地名が分析手段としてどのように用いられているか、それによって何を

知りうるのかを次にみることにする。

#### IV. 分析手段としての地名

##### 一事例研究からみた動向一

歴史地理学において、史料に記載されている歴史地名を既知の地名と対比し、現地比定を行い、歴史的景観の復元をめざす研究には膨大な蓄積があるが、このような研究では地名は単なる位置を示す符号として扱われている場合が多く、地名の意味を考慮したものはほとんどみられない。

そこでまず、言語学の立場から行われた研究についてみると、柴田武<sup>53)</sup>、井上史雄<sup>54)</sup>は、一般の地図には記載されず通称・俗称とされる地名を「微細地名」と呼び、この「微細地名」は住民の口頭伝承であり、方言語彙として記述される価値があることや、日常生活に欠かせない重要語彙である地名を「個人語彙」として扱う必要があることを指摘した。そこで能登半島の一集落を調査し、その結果を自発的に思い出した使用地名と、聞いてわかるという「理解地名」に分けて整理し、「微細地名」の語彙の個人差の大きいことを明らかにした。地図に記載されない地名の言語学的な分析を目指したものに上野智子<sup>55)</sup>の研究がある。上野は、一つの島の海岸地名が2集落間で語彙量の差が著しいことを明らかにし、それは2集落の開拓の歴史、漁法の違いが反映しているのではないかと述べる。

次に民俗学では、柳田以後、体系的な地名研究の試みはほとんどみられない<sup>56)</sup>。近年、松崎憲三<sup>57)</sup>は、村落における空間構成と民俗事象を統一的に把握するため8つの空間構成要素を設定し、その要素の1つとして地名をとりあげた。しかし、地名の分析に関する具体的記述はごくわずしかみられない。

また、文化人類学におけるいくつかの研究をみると、まず末原達郎<sup>58)</sup>は、岐阜県白鳥町石徹白を事例に、ムラが「ザイショ」「マワリヤマ」「トオヤマ」の3つに区分され、焼畑耕作にちなんだ「ツクリ」

や「ヤマ」のつく地名が多くみられることを示し、昭和30年代半ばから里山の意味が無くなるにつれ、「ヤマ」の地名、「マワリヤマ」と「トオヤマ」の区分が失われつつあると指摘する。鈴木正崇<sup>59)</sup>は、神奈川県丹沢山東麓の修験者の居住地・八菅山が「寺中不入之地」「御朱印地」「八菅山新田」の3つの空間で構成されるとし、宗教色を帯びた伝説的地名が集中する「寺中不入之地」における〈浄一穢〉の関係を地名から読みとっている。葛野浩昭<sup>60)</sup>は、沖合漁場や地先漁場の山当て図を紹介するとともに、漁師の描いた磯絵図を分析し、磯漁の目標となる「クリ」（海面上に出た岩）を原点に、漁場である「セ」（海面下に隠れた岩）が「上・下・磯・沖」の方向に分けて呼ばれ認識されていることを示した。

地理学においては、住民の環境認識にアプローチする方法として俗称地名を取り扱い、その接尾辞から住民の土地分類を抽出しようとするいくつかの試みがみられる。

その中で地形の民俗分類<sup>61)</sup> (folk taxonomy) の究明を目指したものに、堀信行<sup>62)</sup>、浅野久枝<sup>63)</sup>の研究がある。堀信行は、漁師がサンゴ礁の微地形の生態学的側面を熟知しており、結果的に礁地形に関する方言名称が地形学的分類とよく対応すること、その名称に世代差があることを明らかにした。一方、浅野久枝は海岸地形を中心とした民俗分類を検出し、その体系がいくつか重なりあっていることを指摘し、また伝統的環境観が生業形態と関連していることに言及した。

このほか、中島弘二<sup>64)</sup>は、俗称地名から「山」「原」「谷」「尾」などの土地分類を抽出し、主体的な環境区分が伝統的な山地利用の空間的配置と密接に結びついていることを示している。また古田充宏<sup>65)</sup>は、戦前においては土地が多様な伝統的生業とのかかわりにおいてこまやかに認識され、「ナルヤマ」「ミヤマ」「オオミヤマ」といった山の基本的分類がみられたが、戦後には土地利用の集約度の低下とともに環境

認識があいまいになったと論じている。

これらの研究では漁村、山村が対象となっているが、これは漁村、山村が複雑な地形条件にあること、漁場、林野が共同で利用され、むら人総体と土地が密接に結びついていることから、こまやかに土地が命名されていることによるのであろう。一方、水田経営を中心とする農村でも田畑一枚ごとにこまかく地名がつけられているところもあるが、田畑の利用は個別的なものであるため、その地名の知識はむら人共有のものになりにくい。しかし、水津一朗が指摘したように、小字が特定の水がかりをもつとすれば<sup>66)</sup>、小字と灌漑区域の関係を探ることが、水田とそれをそれを開拓した人々のつながりを解く鍵となるだろう<sup>67)</sup>。

ここまでいくつかの事例研究をみてきたが、近年、関心が高まっている環境認識の研究において小地名を利用したアプローチが試みられているのが目立つ。これらの研究は従来みられた語源の探求を中心とする研究とは異なり、そこでは地名の名称の体系を抽出することによって住民の知識を記述しようとしている。

地名は言語によって名づけられた語彙であり、こうした研究は、言語人類学<sup>68)</sup>や認識人類学<sup>69)</sup>において蓄積されてきた親族名称、生物名称、色彩名称などにみられる分類の研究と無関係ではない。音や意味を示差的特徴(distinctive feature)<sup>70)</sup>という成分に分析していく成分分析の手法の援用ともいえる。

前述の民俗分類(folk taxonomy)は分類の論理形式の一つで、成分分析における成分の組み合わせの基本的な型にはパラダイム(paradigm)とタクソノミー(taxonomy)がある<sup>71)</sup>。図1に示したように、パラダイムは複数のカテゴリーが交差しあい、階層関係を変えても同じ結合関係の総体が表せる。一方、タクソノミーは階層ごとに示差的特徴が異なり、階層化が生じるため、階層関係を変えることはできない。このタクソノミーは動・植物の分類に典型的に

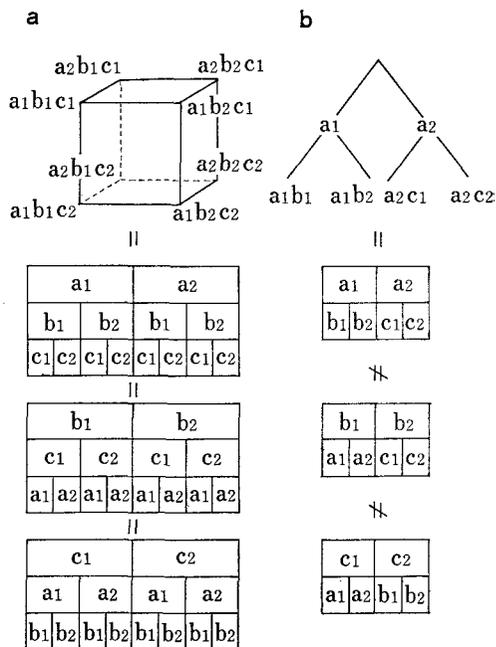


図1 成分の組み合わせの基本的な型  
(池上嘉彦, 1970, 254頁より引用)

- a : パラダイム, b : タクソノミー
- a : どの次元に属する成分も他のすべての次元のすべての成分と結びつく場合
- b : ある次元に属する成分は、次の次元で、たがいに違った成分と結びつく場合

現れる。

それでは、地名の分類はどちらの型により近いのだろうか。前述した堀信行や浅野久枝の研究ではフォーク・タクソノミーの抽出が試みられるが、その結果には階層関係がほとんどみられない。地名の場合、1地点をさすもの、それらを含むある広がりやをさすものといったように空間的な包摂関係をもつが、これは必ずしも分類の階層関係をあらわすわけではない。とくにわが国の地名は多義的であり、名称のもつ意味の対立から階層ごとに示差的特徴を見出すことは難しいだろう。

ここで、一つの分析例をあげる。図2は奈良県西吉野村の小字を使用し、3次元のモデルで図示した

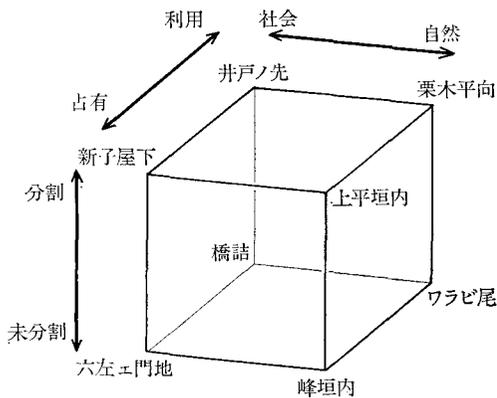


図2 地名の分析例  
(3組の成分の場合)

ものである。便宜的に、「占有—利用」「社会—自然」「分割—未分割」の3つの示差的特徴を求めた。「占有」の次元には垣内・屋号・個人名といった所有を表す語彙，対する「利用」の次元には井戸・ワラビ・栗木・橋といった目標，採集に関する語彙がみられる。また「社会」の次元には屋号・人名や井戸・橋という構造物に関する語彙，対する「自然」の次元には平・峰・尾という地形を表す語彙がみられる。最後の「分割—未分割」の組では、「分割」の次元のみに上・下・先・向といった方向を指示する語彙がみられる。

このように，地名の示差的特徴はお互いに異なる示差的特徴と結びつくパラダイムの型に近いのではないか。もちろんこれはモデルであって，実際にはこれほど純粋な形では現われまいだろう。しかし，地名の分類を一元的に分析するだけでなく複数の次元から分析し，それぞれの次元の関連を追求することが必要であることは指摘できる。こうした分析によって，こまやかで複雑な土地の分類の様子を浮かびあがらせることが可能になるだろう。

## V. むすび

本稿では，住民の生活に密着した小地名の考察に焦点をあてて，従来の研究をあとづけてきた。

まず，本格的な地名の考察は，柳田国男によって1910年代から始められた。柳田の地名研究は民俗学研究の一分野として行われたもので，地名の命名動機を探ることで，住民が山川原野に対してどのような態度で接していたかを知りうるとした。

地理学では1920年代中頃，小川琢治らによって先鞭がつけられ，辻村太郎，長井政太郎，山口弥一郎らに受け継がれた。そして1940年代より鏡味完二の地名の分布研究が活発に行われた。その後，松尾俊郎，山口恵一郎，千葉徳爾によって，それぞれ独自の視点から研究が進められていったのである。だが大きくみれば，地理学において地名研究に積極的に取り組もうという試みは乏しかったといえる。これは，地名そのものを研究することが，科学としての地理学をめざす動きとは相容れなかったためだろう。

しかしながら，地名が重要な分析手段であることには変わりなく，近年，環境認識に関する研究においても地名を用いているものがみられた。これらの研究は，語源の探求を中心とした伝統的な研究とは方法論的には断絶しているが，地名に対する基本的な理解は柳田国男の考え方を継承していることを忘れてはなるまい。

さきに試みた地名の意味の成分分析は，旧来の語源論にとどまらない新しい視点を与えてくれるが，成分分析については「言語におけるさまざまな名称が現実世界の中の対象にどのようにして適用されるかを示すというささやかな目的の方で満足し，認識の構造というような非現実的な目標を追求することは止めるべきだ」<sup>72)</sup>として，その手法の限界が指摘されている。また分析の対象は，親族名称のように，その範囲が規定された閉じられた集合で二項対立的な示差的特徴が定められるものについては効果的である。しかし，わが国の地名は非常に複雑で，その命名も不規則で非体系的であるため，このような分析が常に効果を発揮するとは限らない。しかしながら，名称の使われ方を研究することが「認識の体系を描

き出してみせるための有益な出発点となる」<sup>73)</sup>ならば、土地の名称である地名を研究することによって、土地に対する認識を探りだす貴重な手がかりを得ることができよう。

さらに、地理学と言語学の対応関係の中で地名を問い直すことが重要な課題となる。水津一朗は「地名を介して、表現するものとされるもの、言語と景観とが、同じ場所で一つにとけあう」と述べ、言語と景観の共有物として地名を位置づける<sup>74)</sup>。こうした観点からも、景観あるいは場所のもつ象徴的な意味を解き明かすために地名を用いることが一つの手段となりうるということが理解される。

そして、こうして得られた結果が実際の行動や生活とどのようにつながるのか、社会組織とどのようなかかわりをもつのか、といった点をさらに検討していく必要がある。

(奈良女子大学・院)

#### [注]

- 1) 研究史については、鏡味明克の次の諸論文が参考になる。
  - ①鏡味明克「地名の言語学的諸問題と展望」(山口恵一郎編『地図と地名』古今書院、1974) 44~66頁。
  - ②同「地名は過去を語る一地名学とは何か」言語生活327, 1979, 18~29頁。
  - ③同『地名学入門』大修館書店, 1984, 73~91頁。
- 2) ①新井白石「国郡名字考」, 1712。(『新井白石全集6』国書刊行会, 1907) 493~496頁。
  - ②同「地名河川兩字通用考」, 1712? (『新井白石全集6』国書刊行会, 1907) 503~504頁。  
刊年については、宮崎道生『新井白石の研究』(吉川弘文館, 1958, 757頁) 参照。
- 3) ①本居宣長「国号考」, 1787。(『本居宣長全集8』筑摩書房, 1972) 447~472頁。
  - ②同「地名字音転用例」, 1800。(『本居宣長全集5』筑摩書房, 1970) 435~458頁。
- 4) 柳岡良弼『日本地理志料』, 1898。(復刻版, 臨川書店, 1966)
- 5) 吉田東伍『大日本地名辞書』, 1900~09。(復刻増補版, 富山房, 1969~71)
- 6) 柳田国男『地名の研究』, 1936。(『定本柳田国男集20』筑摩書房, 1962) 1~213頁。  
次の4編から構成される。
  - ①「地名の話」: 1912年, 東京地学協会での講演筆記。
  - ②「地名と地理」: 1932年, 日本地理学会での講演に基づいたもの。
  - ③「地名と歴史」: 1933年, 愛知県教育会での講演に基づいたもの。
  - ④「地名考説」: 1910~27年にかけて各種雑誌に発表したもの。
- 7) 前掲6) ① 8頁。
- 8) 前掲6) ③ 49頁。
- 9) 前掲6) ② 25頁。
- 10) 前掲6) ② 37頁。
- 11) 前掲6) 4頁。
- 12) 前掲6) ① 8~9頁。
- 13) 前掲6) ④ 81頁。
- 14) 前掲6) ④ 82頁。
- 15) 柳田国男「地名の話」: 1930年, 松本女子師範学校彰風会での講演筆記(『地名の世界』地理27-7臨時増刊号, 1982) 16~25頁。
- 16) 前掲6) ② 37~42頁。
- 17) 民俗学研究所編『民俗学辞典』東京堂, 1951, 367~368頁。
- 18) 桜井徳太郎「まとめ報告」(谷川健一編『地名と日本人』講談社, 1983), 262~267頁。  
本書は、<柳田国男没後二十周年記念シンポジウム>の記録であり、石井進、市川健夫、鏡味明克、谷川健一による討論、「柳田国男『地名の研究』をめぐって」(131~143頁)なども収められている。
- 19) 郷土研究の一つの出発点として、明治43年(1910)に柳田、新渡戸稲造らによって創立された「郷土会」の活動がある。それに先だって新渡戸は、大字・小字が「地方(ちかた)の研究」の良い材料となると述べている。これが柳田に影響を与えたのではないだろうか。『増訂農業本論』, 1908 (『新渡戸稲造全集2』教文館, 1969) 97頁。  
なお、「地方の研究」については、後藤総一郎「地方学の形成」(児玉幸多・林 英夫・芳

- 賀 登編『地方史の思想と視点』柏書房, 1976, 106~118頁)に詳しい。
- その後, 大正11年(1922)の『郷土誌論』の中で, すでに「地名は重要な口碑」として取り上げられている。『定本柳田国男集25』筑摩書房, 1964, 51~52頁。
- 20) 千葉徳爾「地名研究の先覚者たち—柳田国男—」(『地名の世界』地理27-7臨時増刊号, 1982) 80~81頁。
- 21) 前掲6) ②25~26頁。
- 22) 柳田国男「和州地名談」, 1942。(『定本柳田国男集20』筑摩書房, 1962) 222~230頁。
- 23) 山崎直方「地名の起源」地理学評論 2-1・2, 1926, 61~71, 111~129頁。
- 24) 小川琢治「人文地理学の地名学的研究に就いて」歴史と地理18-1・3, 1926, 1~8, 197~210頁。
- 25) 前掲24) 1~2頁。
- 26) 辻村太郎「地名の分布に関する私見」, 1939。(『辻村太郎著作集7』平凡社, 1986)289~298頁。
- 27) 長井政太郎「山形県の地名研究」地理学評論 15-11, 1939, 822~852頁。
- 28) 山口弥一郎『開拓と地名—地名と家名の基礎的研究—』, 1957(『山口弥一郎選集3』世界文庫, 1972) 1~269頁。
- 29) 鏡味完二『日本地名学 科学篇』日本地名学研究所, 1957, 406頁。
- 30) 前掲29) 25頁。
- 31) 前掲29) 37頁。
- 32) 前掲29) 41~43頁。
- 33) 前掲29) 20頁。
- 34) ①松尾俊郎『日本の地名—歴史のなかの風土—』新人物往来社, 1976, 254頁。  
②同『地名の探求』新人物往来社, 1985, 280頁。
- 35) ①山口恵一郎「地名の本質」(同編『地図と地名』古今書院, 1974) 1~21頁。  
②同『地名を考える』日本放送出版協会, 1977, 226頁。  
③同『地図に地名を探る』古今書院, 1987, 246頁。
- 36) ①千葉徳爾『新・地名の研究』古今書院, 1983, 266頁。
- ②同「日本民俗学の研究方法における二, 三の問題について—地域変換法を中心に—」歴史人類7, 1979, 87~117頁。
- 37) 前掲34) ①31頁。
- 38) 前掲34) ②36頁。
- 39) 前掲34) ①168~169頁, ②83~84頁。
- 40) 前掲35) ①1~2頁。
- 41) 前掲35) ②62~65頁。
- 42) 前掲35) ②55~56頁。
- 43) 前掲35) ②85~88頁。
- 44) 前掲36) ①1~3頁。
- 45) 前掲36) ①17頁。
- 46) 前掲36) ①22~24頁。
- 47) 前掲36) ①26頁。
- 48) 前掲36) ②108頁。
- 49) 前掲36) ②109~114頁。
- 50) ①水津一朗「小字の歴史地理学—基礎地域の構成要素としての小字—」人文研究8-10, 1957, 39~69頁。  
②同「小字と耕区」(『社会集団の生活空間—その社会地理学的研究—』大明堂, 1969) 102~140頁。
- 51) 金田章裕「条里プランの完成・定着・崩壊プロセス」(『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂, 1985) 43~77頁。
- 52) 前掲50) ②116頁。
- 53) 柴田 武「ある狭い地域における個人語彙としての微細地名」(『方言の世界—ことばの生まれるところ—』平凡社, 1978) 260~288頁。
- 54) 井上史雄「ミクロの地名学—地名の構造—」言語生活327, 1979, 30~39頁。
- 55) 上野智子「長崎県西彼杵郡福島の海岸地名」地理科学33, 1980, 22~32頁。
- 56) その中で, 事例研究をあげると, 大塚博夫「小地名としての川筋名の考察—神奈川県中津上流域の場合—」(日本民俗学90, 1973, 55~64頁), 江端義夫「地形改変にともなう地名語彙伝承の変容—広島県佐伯郡旧五日市町皆賀のばあい—」(日本民俗学119, 1978, 49~57頁) などがある。
- 57) 松崎憲三「村落の空間論的把握に関する事例的研究—千葉県海上町倉橋を試例として—」国立歴史民俗博物館研究報告2, 1983, 1~39頁。
- 58) 末原達郎「日本のムラにおける環境認識の変

- 遷」(石毛直道編『環境と文化—人類学的考察—』日本放送出版協会, 1978) 457~465頁。
- 59) 鈴木正崇「空間構成論—修験集落八菅山を中心として—」民族学研究43-3, 1978, 221~250頁。
- 60) 葛野浩昭「海の地名と漁民の空間認識—越前海岸漁村社会調査第一次報告—」地名と風土1, 1984, 104~113頁。
- 61) 民俗分類とは, 土地で用いられている名称の分類体系を明らかにし, その社会に固有の「科学」を研究するもの。  
松井 健『自然認識の人類学』どうぶつ社, 1983, 275~319頁。
- 62) 堀 信行「奄美諸島における現成サンゴ礁の微地形構成と民族分類」人類科学32, 1979, 187~224頁。
- 63) 浅野久枝「東京都三宅島における地形を主とした民俗分類体系」地理学評論57-8, 1984, 519~536頁。
- 64) 中島弘二「脊振山麓東脊振村における伝統的環境利用—主体的環境区分をとおして—」人文地理38-1, 1986, 41~55頁。
- 65) 吉田充宏「西中国山地における山村の土地利用と環境認識—広島県山形郡戸河内町那須を事例にして—」地理科学42-2, 1987, 96~112頁。
- 66) 前掲50) ①41頁。
- 67) こうした問題を取り扱ったものに, 白石太良「水利単位としての小字—鳥取県羽合平野の事例—」(人文地理23-6, 1971, 646~657頁), 黒沢夕子「井水路をめぐる風土—琵琶湖西・高島町音羽の風土と歴史的背景—」(地名と風土1, 1984, 83~103頁) などがある。
- 68) 和田祐一・崎山 理編『現代の人類学③ 言語人類学』至文堂, 1984, 288頁。
- 69) 合田 濤編『現代の文化人類学① 認識人類学』至文堂, 1982, 221頁。
- 70) さまざまな対立を規定するような特徴で, 例えば親族名称では, 世代, 性(男/女), 系(直系/傍系)といった特徴が求められる。
- 71) 池上嘉彦「解説 3. 成分分析」(同訳『文化人類学と言語学』弘文堂, 1970) 252~256頁。
- 72) Burling, R.: 'Cognition and Componential Analysis: God's Truth or Hocus-Pocus?', 1964. (池上嘉彦訳, 前掲71) 141~155頁)
- 73) Frake, C.O.: 'The Ethnographic Study of Cognitive Systems', 1962. (池上嘉彦訳, 前掲71) 121~140頁)
- 74) 水津一朗『景観の深層』地人書房, 1987, 40~45頁。  
また, 地名と場所との記号関係を論じたものに, 内田順文「地名・場所・場所イメージ・場所イメージの記号化に関する試論—」(人文地理39-5, 1987, 1~15頁) がある。

〔付記〕

今春, 奈良女子大学を退官されます樋口節夫先生に, 日頃のご指導にお礼申し上げますとともに, 本稿を献呈させていただきます。